禪の友
ZEN no Tomo
8
2023

ご本山だより

# 大本山永平寺【行持綿密（ぎょうじめんみつ）】

お盆の時期になると、全国のいたるところで、和尚さんが棚経に回り、お檀家さんのご先祖さまのご供養をする光景を見ることでしょう。永平寺にいる指導者や修行僧も同様に、一時的に外出を認めていただき、自らのお寺や師僧のお寺へと戻り、お盆の諸行事を行います。久しぶりに会うお檀家さんからは、「立派になられましたね」「頑張ってくださいね」とねぎらいの言葉をかけていただきます。皆さまに支えられていることを再認識し、修行に邁進していくことを改めて心に決めるのもこの時期です。

では、その間の永平寺の様子はどのようなものでしょうか。多くの僧侶が外出をする為、広い境内には本当に限られた人数の僧侶しか残りません。普段は荘厳で迫力のある朝のお勤めも、いつもとは違う穏やかな雰囲気に包まれます。回廊を行きかう僧侶の姿も少なくなり、山内はとても静かです。回廊に出てみれば、セミの鳴き声や木々の葉の音、川のせせらぎがいつもよりもよく聞こえてきます。

その様な中、永平寺に残った僧侶の生活は普段と何も変わりません。人数が少なくなっても怠ることなく修行を続けるのです。朝四時に起き、坐禅をし、朝のお勤めをして、食事をします。その後も、いつもと同様の日程を一つひとつ大切に行っていきます。

行持という言葉があります。行とは修行、持とは護持のこと。仏祖の行いをそのまま私たちが行い、それを怠ることなく永久に続けていくという意味です。永平寺は行持を綿密に行うことで約八〇〇年もの間、仏法を護持してきました。私たちのこの生活が続く限り、これからもずっと、永平寺には仏法が活きいきと満ち溢れていることでしょう。

大本山永平寺
福井県吉田郡
☎〇七七六・六三・三一〇二

# ご本山だより
# 大本山總持寺

## 【むかえ火や　父のおもかげ　母の顔】

加舎白雄（かやしらお）　作

大本山總持寺
神奈川県横浜市
☎〇四五・五八一・六〇二一

石川県金沢市のキリコ

八月盆は故郷へ帰る大移動が始まります。

コロナウイルス感染症は未だ終息はしてないもののマスクの自由化、五類感染症への移行によって国民の感情は解放感を覚えたようにみえます。

このお盆は地域によっては盆入りの十三日夕刻に玄関や墓前で迎え火を焚き、十六日の夕刻には送り火を焚くようです。

またある地方ではキリコといって木材で作った枠の側面に半紙を貼った箱型の灯籠に供養する戒名、法名を書き入れ墓前に供えて迎え火とする習慣の所もあります。

いずれにしても先祖を思い、父母、兄弟の在りし日のおもかげを抱くと同時に感謝の心を表していくことが供養となるのです。

この旧盆の總持寺は修行僧のほとんどが師寮寺（師僧のお寺）補佐で他出（帰省）し、山内はひとときの静寂が生まれます。

特に今春上山した修行僧にとっては初めての他出であり、半年間の修行の成果をお師匠さまや檀信徒の方々に見ていただく機会でもあります。

この旧盆の行持が終わると修行僧は本山に戻り再び修行生活が始まるのです。

来年はいよいよ開祖・瑩山禅師さま七〇〇年の大遠忌の年に当たります。瑩山禅師さまが教えられた『一味同心』の御心を大切にし、全山一丸となってこの五十年に一度の大法要を迎えることになります。

# 曹洞 俳壇

選・坊城俊樹

## 人生は竜宮伝説明易し

群馬県　大渕　洋

評　人生というものはお伽噺。でもそれもあっと言う間に過ぎてしまう。そしてその夢も夏の朝の如く直ぐに終わる。何かしみじみとした教訓を感じる。しかしこの季題の斡旋は的確でまことに上手い。実際この季題は仏教観を伴うものとして知られている。

## 輪廻転生たんぽぽの綿毛飛ぶ

福岡県　安部　正和

評　これまた仏教的な要素を用いている。しかしこの句は科学的でもある。蒲公英の綿毛は飛んで次の世代を産む旅をする。どんな生物にも子孫を残して輪廻転生をすることがあるのかも知れない。俳句とはこんな短い詩の中で巨大な宇宙を語らせる。

◆白扇を閉ぢ一線を画されし　岐阜県　大下雅子

◆新社員青く輝く腕時計　埼玉県　伊藤　博

◆炎帝に仕へ骨まで農夫たり　大阪府　柏原才子

◆たましひの先行く道のかげろへる　島根県　金山　陽

◆オリーブの石鹸四角朧の夜　長野県　森山昌子

◆結界を渡る思案の蟻の列　兵庫県　内藤昭子

◆法堂の池の蛙も回向かな　神奈川県　佐野　勇

◆虫捕りの声遠くより五月風　山口県　稲村みどり

◆繕ひの針を休めて春惜しむ　東京都　鈴木英治

◆余生とや何するとなく甚平着て　秋田県　鈴木ゑい子

選者吟

## 聖路加の鐘鳴る春の天使へと

俊樹

作句小見　聖路加病院のこと。実は私はそこで産まれた。母がそこの看護婦をしていたからである。この天使とはキリスト教の天使。私は別段キリスト教の信者でもないのだが、俳句の吟行会でそこに行った時、鐘の音を聴いて涙が出そうになった。

【送付先】〒105-8544　東京都港区芝2-5-2　曹洞宗宗務庁　禅の友係

# 曹洞 歌壇

選・長澤 ちづ

**養蚕のかつての富に感謝して桑の古木を畑に残せり**

埼玉県　荒井 巳喜雄

評　かつて養蚕が盛んだった地に代々住んできた作者の家。製糸業の衰退と共に養蚕業も衰え、蚕の餌となる桑の木を栽培する必要がなくなった。桑畑に感謝して桑の古木一本を残そうとする作者の飾らぬ思いの通った一首である。

**青鷺が水路へ来ては一羽立つ自分の居場所それは大切**

岐阜県　後藤 進

評　上句の叙景から、下句への展開が興味深い。下句は青鷺のことかと思わせて人間社会への暗示がありそうだ。職場でも家庭でも、まことに居場所が大切だ。

◆豌豆の莱の上の熱己が身へ取り込まむとす足長蜂は
静岡県　小川 健治

◆「我のこころはいつもくれなゐ」とふ九十七歳　白寿は真紅の薔薇のごとあれ
北海道　菅原 三江子

◆田を消して大型店舗建つと言う朝霧裂いてかっこうが鳴く
福島県　佐藤 忠

◆村の朝エネルギーが響き合うチェンソー、トラクターに子等の歓声
秋田県　小松 紀子

◆出席の出来ぬ老女に試みるラインのビデオ通話の法事
静岡県　末光 愛正

◆揚げ雲雀下(お)りくる雲雀鳴く声の止み間なくして雨はれし朝
鳥取県　徳本 義則

◆手の平にのせて眺める金平糖戦後の吾ら子供のあこがれ
山口県　濱田 道子

◆仕事して父母の介護に明け暮れし気力と体力どこから出たか
岩手県　千葉 喜惠

◆その花をあらかた散らし山峡の古刹の寺の高き桜木
埼玉市　白藤 巳玲

◆耳遠き寡黙な夫の大声にかけつけてみれば電話中なり
群馬県　松本 さえ子

選者詠

**ガラスペンに手紙を書けばペン先に開けゆくなり春の滑走路**

ちづ

作歌小見　小川さんの足長蜂を凝視する視線の濃やかさに心打たれる。菅原さんの眼差しが向けるこの後三年間の尊さ、濱田さんが手の平に見つめる七十年の時間の濃さ、短歌は小さい詩形とは言え、その幅広い許容力をあらためて思います。



ハガキ１通に３句（３首）以内を俳壇、歌壇別々に住所（都道府県名から）・氏名を楷書ではっきりと記入し送付先までお送りください。